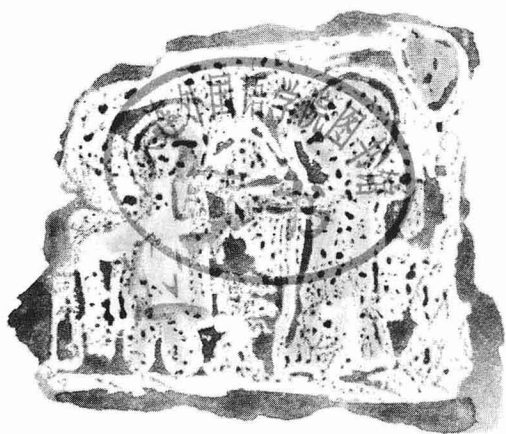


流浪の人

堤 邦子



東都書房版

流 浪 の 人

¥ 280

昭和 32 年 11 月 25 日
第 一 刷 発 行 ©

昭 和 32 年 12 月 7 日 第 六 刷 発 行

著 者 堤^{つみ} 邦^{くに}子^こ

発行者 黒 川 義 道

印刷所 慶 昌 堂 印 刷 株 式 会 社

東京都文京区音羽町 3 の 19
発行所 東 都 書 房

電話・大塚 (94) 3 1 2 1
振替・東 京 7 2 7 3 2

乱丁・落丁のあるときは、おとりか
えいたします。 (製本・大進堂)

目次

第一部

一

第二部

允

第三部

二

第一部

音という程の音ではない。

が、外はしめやかに雨の気配である。

立ち上つて遙子^{ようこ}はカァテンを寄せ、蒸気でくもつた窓から外を眺めた。

冬がはじまっている。……疑いもなくためらいもない季節の足どり。プラタナの葉も落ちつくし、幅ひろい舗道は夜毎の雨に濡れはじめ、パリはすでに人々が〈灰色の〉とよぶながい冬の季節に入りはじめていた。

眼の下にくるぐると眠りにしずんだリュクサンブール公園のひろがりがある。なまめかしく腕をさしのべた榆^{トナリ}の梢の遠くむこうに、サン・ミッシェル街の明滅のない平板な灯の色が、やわらかく夜気ににじんでいた。

今夜も眠れそうにないのだった。煙草に火をつけ、遙子はぼんやりと灯のあたりに眼をむけている。灯の下に微かにうずまいている潮騒^{しほざい}に似た遠いざわめきの音。それはやがて小さく鋭い、悲鳴に似た叫び声をたて、ささやき交しながら、ひとすじの尾をひいて、次第に暗い空にのぼっていくようであった。

あれは、あの叫び声は、いつか無限の闇に吸いこまれ、身もだえながら消え、そしてながい沈黙

のあとに、何ごともなかったような無造作な白い朝が、又、やってくるのだ。……

せまい部屋に煙草のけむりがこもりはじめ。四囲はすでにしんとしずまり、隣室のアメリカ人の打つタイプの音だけが、さわさわと間断なくひびいていた。

パリ六区、リュウ・ギネメーのホテルの、五階の一室。桃色の地厚なカーテン。今迄よこたわっていたあとのある、花模様のカヴァーのかかったままのベッド。二つの椅子とテーブル。本棚に少しの本。

電燈を消した暗い部屋の中で、スエーターの上に紅いガウンをはおり、放心したように窓に向つていた遙子は、窓から離れると再びベッドに身をよこたえ、息をひそめてその音をきいた。

そして、あそこには——、まだ、誰か、生きて、平常な息づかいで、動いている人間がいる。せわしげに、あられを炒るようなひそやかな騒々しさで、その背後の無数の生活につながっているあの音。一人の人間のうしろで器用にいりくみ、次第にひろがっている大きな生活の環。今の、この瞬間の私を、かろうじてその環のつらなりの中にとどめさせているあの音。だが——、やがてあれが途絶え、熄み、そしてしんから音の無い長い夜がやってくる。私の占める場処と、私の呼吸とを奪ってしまう恐ろしいながい夜が。……

起き上って厚い毛の外套をひっかけ、足音をしのばせて遙子は部屋を出た。鍵穴にさした鍵が、カチリと小さな音をたててまわる。もうあかりの消えた廊下の暗がりに、つめたく光っている黒い自動昇降機の扉をあけ、赤くまるいボタンを押して、すうっとさがっていくボックスの中で、遙子のはかるく眩暈を感じて眼をとじた。

自分自身が、まるでぬけがらのように軽く、遙子には感じられるのだ。

今こうしてここにいるのは、これはたしかに私自身なのだろうか。……

それは全く、幻覚の中をただよっているような頼りなさだった。自分が今、何に向って動いているのか、これから何をしようとしているのかが判らない。それらの意識は次第に、とらえどころなく、あいまいなたそがれ時の色のようにぼやけていき、遙子に今たしかに判っていることは、ただこの瞬間の自分の立っている位置でしかない心地がする。

意志の喪失——というより、深い酔いに似たこの現実感の稀薄さ、それは時折り病やまのように、最近の遙子におとずれてくる。そして、それが何によるものであるか、遙子自身にはよく解っているのだった。

階下の帳場で、眠たげに帳簿をくっていたホテルの夜番の老人は、エレベーターからぼんやりとした顔つきで出てきた遙子を見ると、めがねの位置をなおしながら軽く顔をしかめた。(一体どこへ行くというのだろう、この夜更けに。)

壁にかかった大時計の短い針が、わずかに動いて十一時を指し、入口の厚いガラスの扉が、にぶい音を立てて軋みながら遙子の背後でしまった。

雨にぬれ出した街は黒く光ったまま、しずかで何の動きもない。ガス燈の気弱なあかりを浴びている暗緑色の公園の鉄柵に沿い、つめたい外気に身ぶるいして、遙子は外套の衿えりを立てた。靴音が、ばかに、ひびき過ぎるようだ。道の片側にかぶさるように高くつづいている建物ビルにこだまして、闇の中を大きくひろがっていく自身の靴音に、おそわれるようにおびえながら、パンテオン(万神廟)のドームの青い輝きに向って、遙子はゆっくりと歩いて行った。

それはもう、久しいことになるのだった。彼女が夜を怖れるようになってから。

遙子が独りでパリに暮らすようになってから、もう一年余り経つ。このパリでの最初の四季は、長いようでしかし遙子には短いものであった。あの日本を發つた夜の、羽田空港のしらじらとあかるい燈火の下でのにぎわいを、昨日の^{きょう}ことのよう^にに遙子は憶い出すのだ。ガラス箱のように清潔だった羽田空港のロビー、――外にはしかし木枯しに似た冷たい風が、音をたてて吹き荒れていたのをおぼえている。……

旅客に注意を与えるスピーカーが時折り鳴り出す、何となくあわただしいターミナルの二階の広いグリルで、遙子は花束をかかえ、黒い^コオトの胸にも花をつけて、魚のように沢山の見送人の間を泳ぎまわっていた。

「体に気をつけてね。向うへ着いたらお手紙を頂戴ね。」

「ありがとう。貴女もお元気でね。」

これという親しい友人も持たなかった筈の遙子なのに、どこからともなく遙子の出発を伝えきいたのか、若い女の旅立ちらしく、彼女の周囲を華やかな色どりのひとむれがとり巻いていた。

どの顔も、だが、ただ何となくこの賑やかな情景に浸って、他愛なくたのしんでいるという風で、しみじみと別れを惜しむというような風情は、その人達の中には無かった。

白い革の手ぶくろを取り、それらの一人一人に、愛想よく遙子は握手をして廻りながら、ちらと、ロビーの隅のソファで、ゆっくりと煙草を吹かしている志田の方を眺めやった。

渋いグレイの背広を着て、ソファに深く腰をおろしている志田の視線は、終始遙子の姿を追って

いたらしく、遙子は自分をじっとみつめている彼の眼にぶつかり、かるく狼狽ろうたえて瞳をそらした。いくら疲れたような彼の表情にはやさしさがにじみ、その奥底には、おさえた悲しみがたたえられていたようだった。

（別れを惜しんでくれる人は、やはりこの人だけなのだ。）

志田との月日が、急に鮮かに遙子の胸によみがえり、彼女の心の中に、締めつけられるように鋭く、その日々への悔いが湧いた。瞬間、遙子はこの旅立ちを思いとどまりたいとさえ思った。だが、それはほんの瞬間だけのことで、遙子はすぐ伏せた瞳をあげ、近づいてきた知人の若い夫妻の方に、にこやかな笑顔を向けていた。

弱気になってはいけない。私は彼を愛してはいないのだから――。

人々を相手に、心にもない仕ぐさを演ずることも今日でお終いなのだと思うと、遙子は気が晴れぱれとしてきて、それを思うことで強しいて志田に対する感傷をうち忘れようとつとめ、それから頑固に彼の方をふりむかなかった。

まるで自分が発はって行くひとであるかのように、装いをこらしたその実業家の若夫人は、いそがしくショールを取りながら、遙子につやのある声音で話しかけた。

「お独りでいらっしゃるなんて、おえらいわねえ。」

遙子は意味なく微笑しながら、自分が何をほめられているのか判らなかつた。私は今、自分というものを尊ぶあまり、もう呼吸をする場処のなくなつたこの国から、卑怯にも脱け出そうとしているのに――と、遙子は思った。それは、未来というもののへの、遙子という女の意欲をひそめた、はなやいだ旅立ちではあつたが、同時に又、すでに消えがたく時を刻んだ自分の過去の堆積を、その

過誤の重みゆえに断ちきろうとする、不敵な葬送の試みでもあったのだから――。

だが、その夫人の言葉は、志田との関係をうすく知っている彼女の、遙子への軽い揶揄であるのかとも思われた。

アナウンスが、英語と日本語の両方で、税関の検査が始まることを告げはじめた。遙子は、かたわらの椅子から小さいスーツケースと化粧鞆をとりあげ、花束を胸にかかえなおした。それはゆたかに開いた黄色い薔薇ばらひつといろのみを、ひしめくようにたたねた大きい束で、遙子の好みをよく知っている志田が、見送りの人々の来る前に彼女に渡したものだ。

遙子は自分の腕の中で、生きもののようにつややかに、豊満に、厚い花べんをひろげているその薔薇を見やり、ちょっとためらったのち、人々の視線をうしろに感じながら、思い切った足どりで、まだ腰をおろしたままにいる志田の方へ近づいて行つた。

志田は黙って立ちあがり、沈鬱な表情でひととき遙子を見つめ、それからやはり黙ったまま彼女の右手からスーツケースと化粧鞆をとると、ソファの上においた。彼が黙っていることが、かすかに遙子を畏れさせ、遙子は言葉なを失くしてしばらく志田を見あげていたが、やがて眼を伏せ、そして呟くように小さい声で云った。

「すみません。じゃ、わたし行ってくる。今迄のこといろいろと全部、本当にありがとう。」それは遙子自身にも思いがけなかった程、素直な調子だった。

(この人は、いつも私にやさしかったのだ。……)

志田のグリーンのかかった、好みのよい、枯葉色のネクタイのあたりを見つめながら、遙子はぼんやりとそれを思った。

志田はちょっと動揺したように眼をしばたとき、すぐ間近にある遙子の、鼻すじの通った白い細い顔と、革の帽子の下に、び色に光っているやわらかな髪の毛のうねりとを、はげしい表情で見おろしていた。

遙子が、自身の過去の葬送を遂げようとするその強烈な手で、自分が遙子へそそぎつくした清澄な愛情までも、合わせて葬ろうとしていることを志田はみつめ、ひろがってくる苦渋に耐えながら、与え、与えられるということのない愛のかたちを、じっと悟っていた。――

飛行機にのりこむ人達が、それぞれに小さい鞆を手にしてロビーから出はじめた。

志田はしずかな低い声で、ゆっくりと云った。

「いいから、何も考えないで――。ただ、のんびりと遊んでらっしゃい。そして、又疲れたら、わたしのところに帰ってくるね。……」

そして、そつと遙子の掌をとると、自分の両掌の中にやわらかくつつみ、最後に強く握りしめた。それは、何もかもわかつているのだという、志田の無言のあきらめを遙子に伝えた。乾いたその掌は、ヒヤリと冷たくて、遙子をみつめている眼だけが、奥の方で暗くちらちらと燃えていた。

アナウンスが同じ言葉をくり返していた。

遙子はそつと志田の掌の中から自分の掌をぬき、荷物を持つとそのまま歩き出した。税関へおりる階段のところで、彼女はふり返って、かたまって見送人の方へ花束を持った方の腕をあげ、軽く振って見せた。花束に添えた白い絹のリボンが、遙子の頬にかかるく触れながら揺れた。

「さよなら！」

「ボン・ボワイヤー・ジュ！」

口々に叫ぶ声を背中に受けながら、遙子は階段を降り、そして、こういう時に必ず傍にいてくれるべき筈の人、親とか、兄弟とか、そういう人の姿を、送ってくれる人の中に一人も持たなかったことを、ちらと思つた。

税関の手つづきは、思つたよりも簡単に済んだ。厚い扉を押して一步戸外へ出ると、烈しい風がごうつと鳴り、冷たく遙子の頬を刺した。真暗な広い空港に、遙子達の乗る旅客機が整備を了えて大きく翼を闇にひろげ、巨大な胴体を白く浮かせている。陸橋の上に、まだ去りがてぬ見送りの人達の群がかさなり合つて並び、髪を風になびかせてタラップを上りながら遙子は、もう一度その黒いかたまりの方へ眼をむけたが、風と闇とでもう、誰の顔もはつきりと見きわめがつかなかった。

口々に別れの言葉を投げているその人達の声の中に、遙子はふと、「遙子！」と鋭く叫んだ志田の声をきいたように思つたが、それは風の音かもしれない。花束をかばうように抱きながら、彼女は、後からタラップをのぼってくる人に、押されるようにして機内に入った。

金髪の丈高いステュワーデスが、忙しげに動き廻っているのを、茫然とした気持で遙子は眺めながら、今別れてきた志田の瞳を思いうかべ、その言葉を心にくり返していた。掌には、まだ彼の冷たかった掌の感触が残っているようだった。

わたし、パリに行くの。

何のために？ 独りで？ 何をしに？ 費用は？

このひと月ばかり、人に会うたびにうるさくつつかれたこの問いに、いい加減まいっていた遙

子は、先刻の志田が、何もいわずにただ、「遊んでいらっしーい。」と云ってくれたその愛情が、しみじみと心に浸みた。そして又考えてみれば、何もかも忘れてただのびやかに遊ぶこと——それも又自分にとっては容易なことではないのだと、遙子には思われた。

かかえていた花の束を、立ち上って遙子は座席の上の棚に置き、かすかな香気を放ってゆれているこの黄色い花のむらがりのみが、今はただいのちをおびて自分を見守っているように感じ、うすい悲しみにおそわれて眼をとじた。

機はやがて、すべるように離陸をはじめていた。空から見おろした東京の街の夜景は、宝石をこまかにちりばめたモザイクのように美しかった。夜更けの空をはずかに上昇していく機内で、遙子は、次第に小さく遠さかっていくその無数の燈火のきらめきを、かたわらの小さい窓から一心に眺め、ふと自分が再びこの灯の中へ帰ってくる日は、もう無いのではないかという予感におそわれて、胸を刺された。

あの中にうち沈めてきた自分の過ぎ去った日々、それはさざ波のような灯のまたたきの中で、小さい焰をあげ、哀しみながらにぶく燃えているように感じられた。

藤木遙子は、両親を持たなかった。東京に生まれ、恵まれた裕福な家庭に幼時を育ったのだけども、兄弟はなく、八歳の時に交通事故で同時に父母を失い、それからミッシェン・スクールの寄宿舎で、孤児として成長した。四国の田舎に、父方の祖父父母がいたので、天涯の孤児というわけではなかったが、肉親の愛情というものは、過去の思い出の中には全く無かった。そして、学校を

出てから志田の世話をうけて大学に通いはじめるようになる迄の月日は、遙子にとって、もっとも悲惨な日々であつた。

眠れぬ夜更けなどに、今でもぼんやりと遙子はその頃のことを憶い出すことがある。

遙子に近寄り、それぞれの別れ方で遙子から去つた男達は、数えれば十指に余つた。どの想い出にも甘さというものはなく、えぐるような痛みだけを遙子にあたえていた。

その頃——、どの男との間にも遙子は、結婚ということを考えなかった。結婚という言葉によつて思ひえがかれる男女の在り方というものを、遙子はどういう風に自分の心の裡にうなずき、ひろげていったらよいのか、まるで見当がつかなかったのだ。次々と結婚しては出来上つていく、世間のひとと組ずつの夫婦というものを、遙子は讃嘆の気持で眺めやった。知り合うまではただの他人であつた一人の男に向つて、女がそそくさと自分の生きる表情を決めてしまひ、結婚という、境界線をめぐらされた一つの狭い土地の中で、その土地にだけ合う生を、女が生涯、生きつづけるということは、遙子にはどうしても合点がいかないのだった。

遙子の生活は、その頃もまだ、彼女の両親がのこした財産を管理している祖父母の手によつて、充分に支えられていた。

遙子は、自分の周囲に無数にひろがつて見える、自分の歩むことの可能な道を、そのどれをも余さずに歩いてみたいという、強い欲求があつた。その道程のかたわらに、時折り黒い影のように立ちあらわれてくる男達の中には、躊躇なくかたはしからぶつかつていき、そして渴いている自分を充たすだけの豊潤なものをその中に見出し得ないことを知ると、そのどれをも一つの傍景としたまま、やはり、ためらいなく過ぎ去つていったのだ。

未知の場処をうずめていく新鮮な愕おどろきと、悦びに憑かれ、渴きをいやすものへの希求から、遙子はまだ陽に当たったことのない、白い細い足でさまざまな生活を試みていった。

遙子にとって、社会はあく迄も、自己の生のために在るのだと思われ、他のために生きる自分の姿というものは、まるで考えられなかった——。そして、目的地はどこかということも又、遙子にとっては傍景ほどにも必要ではなかったのだ。（それは——、歩きながら見つけていけばよいのだ。……）と、遙子は思っていた。

しかし、いつか疲れは来た。白かった手足も汚れに染まり、際限なくひろがって見えた道のどれも同じ風景のくりかえしに過ぎないことが遙子を失望させ、そして——一つの暗い、湿った默契のようなもので、それが自分の手のときかねる遠いところで動かされていることをうすく知りはじめた頃、憧憬を追う翼は、遙子の心の中で、音をたてて衰えていった。

渴きだけが刺すように遙子を苦しめ出した頃、疲れはやってきた。

旅装をつけた人が立ち寄る路傍のかりのすみ家に、その生涯を支え得る程の、永遠に洩れることのない甘い水をのぞむということのむずかしさに、遙子は気づいてはいなかったのだ。もっと他に、もっと別の何かが、どこかにあるにちがいないという期待で、どの生活の中にも安んじきれずにそれらを打ち捨て、同時に、執拗に愛の象すゑをも見きわめようと必死にうつろい歩きながら、しかし、開いた花のように匂っていた自分のかおりを、いつか失いつくし、自分がその中から得てきたものは今、全身をつき刺しているところのような痛みのみであったことを、遙子は愕然と立ち止って見つめていた。

志田に遇ったのは、丁度その頃だった。父親程の年齢の、妻子のある志田の腕に、眼を閉じ、疲